

はじめに

◆キャンパスの顔、豊田講堂と古川図書館

名古屋大学東山キャンパスは名古屋の東部丘陵に位置します。「名古屋大学前」バス停から東は斜面になっていて、そのなかほど、緑地帯・グリーンベルトの端部に、豊田講堂が建っています。また斜面の南側に低く水平にのびる建物は、旧古川図書館（現名古屋大学博物館、古川総合資料館、以後本書では古川図書館と呼ぶ）です。本書では、これら東山キャンパスの顔である二つの建物を取り上げます。

「豊田講堂」あるいは「古川図書館」という名称は、これらの建物がそれぞれトヨタ自動車工業（株）、そして古川為三郎・志ま両氏からの寄付による建物であることに由来します。寄付建物を見直すことは、次のようなことを考えるきっかけとなります。まず、大学と社会との関係についてです。国立大学は政府により設置された学校です。しかし、国立大学といえども社会との緊密な関係に支えられながら発展してきた歴史があり、大学が寄付建物を有するといふことは、それをよくあらわす事実です。



豊田講堂と古川図書館

また寄付建物には、建築のデザインに力の注がれているものが多くみられます。こうした寄付建物のデザインの特徴が、キャンパスの他の建物、キャンパス全体の印象、ひいては大学の雰囲気そのものにまで大きな影響を与えています。

そこでこの本では、豊田講堂と古川図書館の建築デザイン上の特徴を、それぞれの設計者の考え方にまで踏み込んで探っていきます。そして、これら二棟の建築が名古屋大学にとってどう価値づけられるのか、今後大学として、遺産をどのように引き継いでいけばよいのかを考えたいと思います。